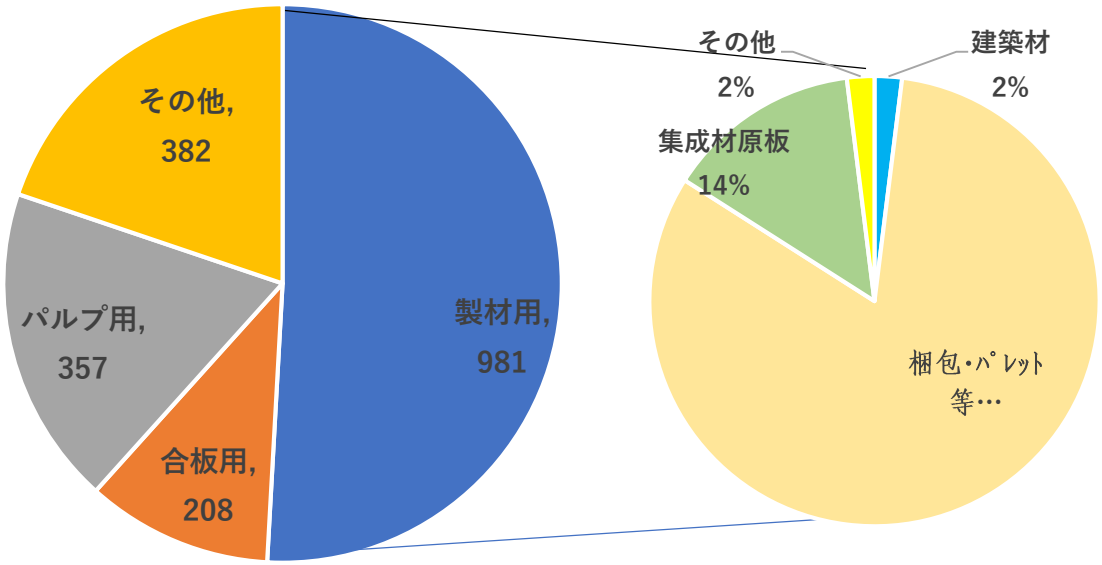
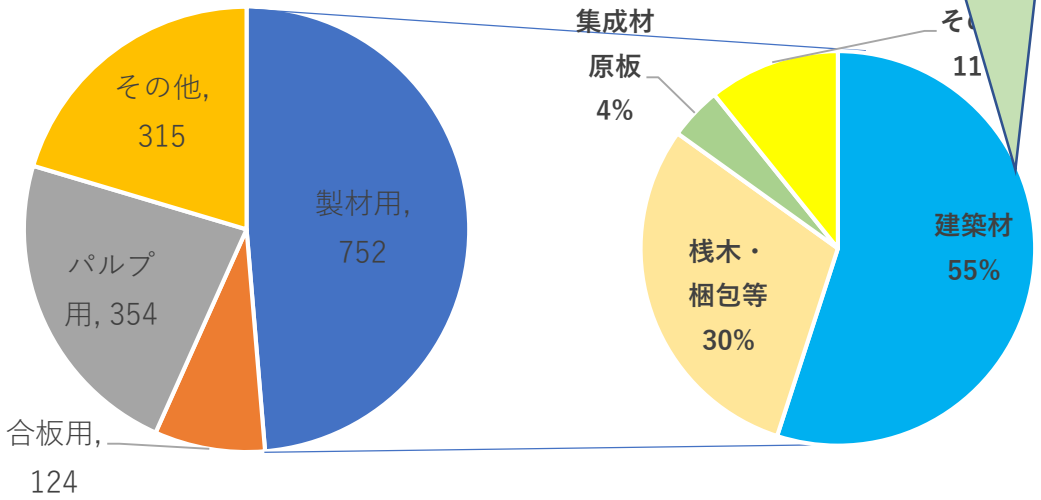
◎北海道の建築材生産の課題：トドマツ・カラマツの利用の現状

カラマツ：１９２８千m3



トドマツ等：１５４５千m3

大半が羽柄材



・トドマツと供に戦後植栽が主体。炭鉱の坑木を目的。
・乾燥捻れ、ヤニ等から、当初建築材としての利用は難しいとされ、梱包材・パレットなどの利用を見出し、現状製材品の大半は梱包材として関東等道外へ。
・集成材のほか乾燥技術の確立で無垢柱、梁生産も可能となったが、外材との価格差は大きく、販路の広がりが課題。

・建築材の目的で戦後造林されたが、主伐期を迎える前に、欧州からの日本向けの建築材、ツーバイ材が席巻。
・桟木（土木等用下地材）等としての利用が主体となり関東等道外へ。
・トドマツの建築用材は垂木・貫・胴縁などの羽柄材が主体
・不規則な乾燥割れが生じ、無垢柱の生産は困難で、集成材は同じ白物のｗｗとの価格差が大きく現在の生産量は非常に少ない。

道産建築材シェア２０％

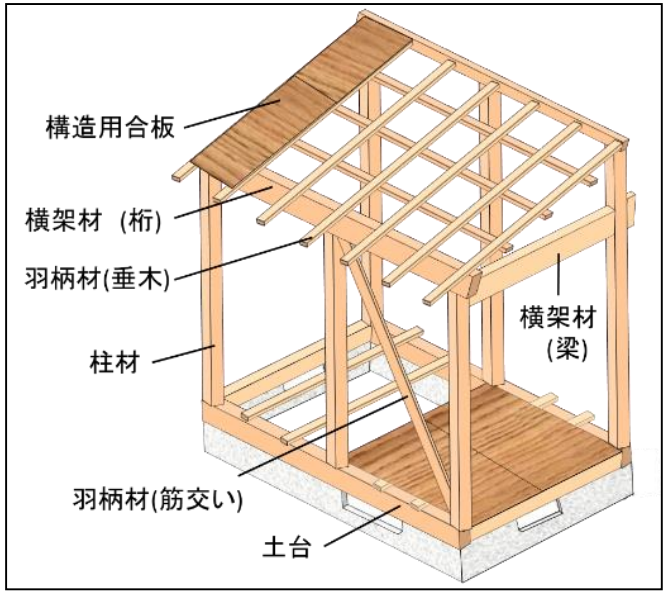
【課題】

- 原木
- 乾燥
- 価格
- その他

○道産針葉樹材の主要な製品

カラマツパレット

カラマツ梱包材



カラマツ集成材

トドマツ桟木

トドマツ羽柄材

カラマツコアドライ

◎なぜ木材を使うのか：温暖化対策からのアプローチ

①木材は素材を作るためのエネルギーが少ない

マテリアルとして、鉄やコンクリートに比べて生産するためのエネルギーは３割程度少ない。

②木材は炭素の固まりである：ＨＷＰからのアプローチ

ＨＷＰ：Harvested Wood Products

パリ協定の第２約束期間から、それまで伐採した木材はすべて炭素として放出されるとしていたものを、一定の木材（きちんと経営された自国の山林からの木材で作られた製材、木質パネル、紙は一定の期間炭素を固定しているものとしてカウントされることになった。

〇これまで：ネットの炭素固定量＝森林の生長量－伐採量

◎第２約束期間：ネットの炭素固定量＝森林の生長量－
（伐採量－製材品等における固定量）

**地域（国内）できちんと管理された森林からの木材を住宅等の部材として
できるだけ長く使うほどカーボンニュートラルの実現に近づくこととなる**

◎なぜ道産材なのか：ＳＤＧｓからのアプローチ

自国で生産されたもの、地域で生産されたものを使う割合が指標として提示されている。

ゴール１２：**持続可能な生産消費**形態を確保する。 （**つくる責任・つかう責任**）		
	ターゲット12.2：２０３０年までに**天然資源の持続可能な管理及び効率的な利用**を達成する。	指標12.2.1：**マテリアルフットプリント**（ＭＦ）及び一人当たり、ＧＤＰ当たりのＭＦ
		指標12.2.2：**国内材料消費量（ＤＭＣ）**及び一人当たり、ＧＤＰ当たりのＤＭＣ

ＤＭＣ：Domestic Material Consumption

すべてのＳＤＧｓバッジを付けている国民に問う？
Ｑ：あなたの企業、組織はＳＤＧｓを標榜していますが、自国の資源、自国で生産されたものをどれだけ使っていますか？？